

日立評論 50 周年に際して

馬場 条夫

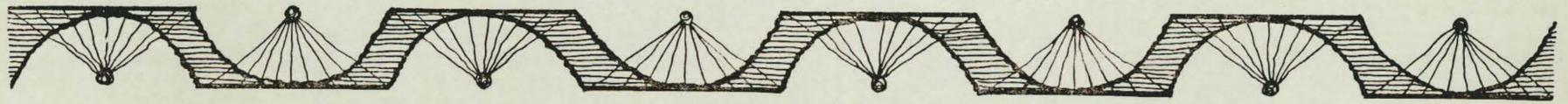
日立評論は 1918 年の創刊で本年は正に 50 周年に当る。顧みれば本誌は自分の創設したものであるが、当初は起伏もあり、無事平坦な生い立ちではなかった。今 50 年といわれ、年月の立つのは早いものかなと痛感する。茲に往時を回顧し併せて希望などを述べてみたい。

1918 年創刊は元気よく行われた。然し当初両三年間の苦難は名状し難いものがあった。実に 2, 3 の欠号もあり自分は屢々廃刊しようかとさえ思った程である。然しこれは幼童就学における退学と同じで宜しくないと戒める人があり、また非常な努力を以て援助して下さった人々がいら



た。それは故和島藤助氏、故大林三吉氏、故横井信義氏、故豊田博司氏、故秦常造氏、前橋俊一氏などの諸氏で、その激励と支援とがなくては存続し得なかったであろう。元来本誌の創設は故小平社長のお許しを得て行われたのであるが、その時故小平社長より「なかなか容易ではないぞ」とのご注意があった。従って挫折しそうになった折に普通の人なら「それみろ。いわないことではないぞ」と叱られ、「君、それは止め給え」といわれたかも知れない。けれど故小平社長はそうはいわれなくて、苦勞を共にするという風に援助して下さった。こういう徳義に厚い方であったため廃刊の悲運に陥らなかったのである。これら数氏の方々には既に故人となり、独り生き残った自分としては実に感慨無量である。今日日立評論の隆盛の現状をそれらの方々の霊前に供して深くお礼を申したい思いで一杯である。その後も多くの方々に助けられ今日に到ったが、それは日立評論誌上に残された歴史によって示されており、冗説を要すまいから略する。皆様有難うございましたと申上げる次第である。

50 年という人間 1 代の働く年数に相当する。その中間において日本は第 2 次大戦争に際会した。その大敗戦直後は自分は追放となり、本誌と数年間縁切れとなった。然し本誌は学術研鑽の目標を以て創設されたので、戦時物資不足のときにも紙の配分を受ることができ、終戦前後約 2 年間、物資不足のため休刊したとはいえ、戦後の占領治下においても廃絶の指定を受けずに存続され、今日に到った次第である。これは学問中心で動かなかったためである。また日立製作所が外部からいろいろ激励を受けたが、社運再



興隆々となったのが幸していると思われる。

自分は故小平社長から研究方面を全面的に一任され、これには研究者を作ることが大切と考え、丁度日立評論の第20年目頃から学位所有者の養成を企てた。わが社の研究は電機に始まり多方面に伸びたが科学工学中心に研鑽を進め、一方、本誌も亦電気工学専門誌としてスタートしたが科学工学中心に努力して来たので、自分の学位所有者の養成と日立評論の発展とは略並進して、互に深い関係があったと追懐している。

本誌の掲載論文は日立の発展と並行して電機のみならず諸機械、金属、化学など多方面に進出した。発刊当時を顧みると英国、独逸および米国の大会社では社誌を刊行していたので、吾々日立もこれに学ぶべきだと考えたのが本誌創設の動機であった。わが国に学会誌は少なくなく、物理学学会誌、化学学会誌などはその頃既に刊行されていた。また工学は少し遅れたが、電気、機械、化学、鉄鋼、金属関係の会誌がそれぞれ隆盛に赴いた。日立は重工業、軽電機製品を中心に多方面へと漸次発展して往ったので、本誌上の諸論文も多方面多種に亘るものとなり、自から特殊の面目を備えることになった。すなわち学会誌がそれぞれ別個の専門誌であるのに対して、本誌は多方面多種の総合誌となったのである。これは企業の雑誌としては自然のことともいい得ようが、また重要な意義があり、将来とも尊重堅持されたいものである。

要するに全50年中、当初15年位は謂わば幼童勉学の時期、次の20年位は、その間には戦後混沌とした世もあり、隠忍修行した時期、最後の15年位は発展繁昌に到った時期と思っている。

日立評論の既往の足取りの概観は前述の如くである。現状は日立製作所が日本有数の会社に進出したのに連れて相当有力なものとなっているのであろう。最近兩三年評論の内容の精見は出来ないが本誌が将来確固保持されたい希望

を述べておく。

日立製作所では堅忍持久の精神を貫いて来たが、さらにその発祥の地が水戸に近いので水戸学の風をうける傾向があった。然し多くの人の集団であり、人々は多彩であったし、事業も多方面に進出した。自分はこれらの事業を進めまた連絡を取っている間に貝原益軒や中江藤樹の学風と禅思想の影響を享けることになった。それらを混然とし纏めたものを落穂拾い理念として72文字の短文に要約して社内示した。その根本理念は捨^〇質^〇執^〇真^〇ということであって、誠の心を持って正真を追求することを説いたものである。水戸学学風の過剛なのを中和した学風である。その精神は科学や工学を取扱う場合にも当てはまるものであり、日立評論の根本理念も亦それでよいと考えている。50年間の経験より考えてこれだけは逸脱することのないよう深く希望する。

日立は人も多くなり業務も多彩になるにつれて会社を多くの独立会社に分割して来た。電線、金属、化成などはその主なものである。そこで日立評論も分割する議論が出るのではないかと案ぜられる。それぞれの専門分野において経営並びに学術は益々深からんことを希望するが、それらの総合協力を重視することを熱望するのである。評論においても過って分割を計画してはならない。

さらに編集に当っては外部の先進するのを眺めて、慌てて未完成未確定な研究を發表するというような堅忍持久に背反することのないよう大いに用心されたい。

要するに複雑多岐なる異ったラインの総合化は重要必須であり、従って日立評論の総合性は実に緊要なものである。狭い境界内の眼識で大局を失うことのないように深く望むと共に、青壯年士の血気に馳やり堅忍持久の精神の崩されることのないことを重ねて強調し希望する。

(株式会社日立製作所 顧問)